

目の前のものを数えてそれを「～本」とするか、「～枚」とするかという行為を通して、対象の属性を類型化しカテゴライズする助数詞は、我々はその対象をどのようなものと捉えているかを知る指標となる。助数詞を研究対象とすることの先にあるものは意味と認知との識別の世界であろう。

しかしながら、日本語の助数詞の実態は、共通語に関しては辞書の巻末に一括提示される程度にとどまり、全国的な方言の実態についてはいくつかの地域方言について断片的な記述がなされてきたにとどまる。

地域的なひろがり支えられた方言の生活における、「もの・こと」に対する対象認知のしかたは、従来の方言地理学の成果を引くまでもなく多種多彩である。名付けの行為そのものに目をむける方向と相補うかたちで、そのものをどう数えるかに共通語的な世界にはない豊かな発想を観察することができるのではないか。このような問題意識に基づいて、1995年度方言研究ゼミナールで本巻のテーマが決定された。

さっそく、調査項目の選定と調査票の作成を大橋勝男氏に依頼したが、どのような助数詞に地域性が現れるか予想できない段階で、限られた名詞をピックアップするという非常に困難な作業をお願いする結果になった。はじめ、数えられると考えられる「もの・こと」を可能な限り網羅する作業があり、その数600余にのぼったとのことである。紙数に限りのある『方言資料叢刊』で例年通りの地点数を覆ってこれを調査することは不可能であり、調査そのものにも教示者の対応にも限界があることが予想された。

幹事のもとに送られた調査票原案は20分野348項目までに厳選されたものであった。これを広島在住の幹事（江端・友定・町・灰谷）で検討し、さらに16分野232項目まで絞ることになった。再度大橋勝男氏にご検討いただき最終的に決定されたものが、次ページに示す調査項目である。そして1995年8月11日に調査要項と調査票とを各執筆依頼者に送付した。

調査・記述に際しては、調査票の各分野を順次調査した上で調査票にない事象をできる限り拾い上げること、複数の数え方が回答された場合はその違いを確認し、新古、使用品位、使用年層、使用頻度についての情報を得ることを基本方針とした。

ご報告をお寄せいただいたものは、それぞれに地域色豊かな日本語方言の助数詞の姿とその背後にあるものの捉え方の多様性をうかがうことができる資料となった。ご教示をいただいた教示者の方々、ご報告をお寄せくださった執筆者各位にあつくお礼を申し上げる。

とりあげることでできなかった方言助数詞は未だ多いであろう。さらなる実態の把握とこれをもとにした研究の進展を期待したい。

1996年9月13日 記